2日目 第四部

大学教育改革研修「これからの大手前大学」

-C-PLATSを座標軸に据えて-

Analysis & Creativity

平成23年3月11日(金)
於・シーサイドホテル舞子ビラ神戸

分科会メンバー

●教　員	芦田　秀昭	小川　武範	尾崎　耕司	
	川窪　広明	木下　りか	小林　宣之	
	酒井　健	砂押かほる	谷村　要	
	鳥巣　泰生	中崎　修一	吉川　登	
●職　員	人瀬　孝二	金森　正一	森本　喜彦	
	佐藤　香子			

おはようございます。アナリシスとクリエイティビティ分科会報告をまとめさせていただきたいと思います。代表で私がお話しいたしますが、いろいろ出た議論や意見を全部うまく集約できているかというと自信はありません。ただ、こんなことが出たということはお伝えできるかと思います。まずは遅くまで論議に参加いただいた教職員のみなさまにお礼申し上げます。最初にそもそもという話ではないんですけれども、C-PLATSのアナリシスやクリエイティビティの話の前に、こういったことはどうなっているのだろうかということがいくつか出ましたのでそこからお話しさせたいと思います。

まずこうやって話し合われた内容やプランなどは今後どの授業にどのように反映されていくのだろうか、最終的に授業内容に反映させていくときのはだれがまとめていくのだろうか、そういった見通しが正直よくわからないという点です。結局ここだけの話になってしまうのではないかという危惧の表れだと思うのですが、そういったことの見通しが

酒井　健 先生

立てば逆に具体的な意見が積極的に出てくるのではないかという意見です。もうひとつはふりかえりということですけれども、すでに古いバージョンではありますが、C-PLATSについて学生には自己評価をさせ、それらを共有し、コメントをつけたりしております。しかしそれらはどういった意味をもち、学生はどういったところで能力が伸びたとか逆に伸びなかったと言っているのか、というようなことについてはまだ十分な分析ができていない。それこそアナリシスなんですが、そもそも分析ができていない面があるのではないかという意見が出されました。そのような分析を行うことを通して、実際に目の前にいる学生たちに何が足りなくて何を求めていてどうすればいいのかということが見えてくるのではなかろうかと。われわれは頭のなかではいろんなことを考えているけれど、目の前の学生をついつい置き去りにしているのではないか。それでは結局地に足がついた教育にはならないのではないかということです。ひとことで言ってしまえば総括が十分になされていないままま先に進んでしまうということは、結局のところ学生を見ていないということにつながっていて、それでは非常にもったいないことをしてしまっているのではないかということです。しかしこれらのことを言っていると話が前に進まないので、これらを大切にしていきたいということをとりあえず共通に認識したうえで議論を行いました。

まずどういった能力を付けさせたいのかという質疑が最初になされました。とくにクリエイティビティについて出たのですが、クリエイティビティとは結局何を指しているのか。例えば創造性と独創性というのは異なるのではないかという議論がなされました。すでにある科目、授業の内容は多様であり、ボトムアップ的にそれぞれの科目全部にかかわるようなクリエイティビティを定義するのは実際難しいのでは

ないかということです。それに対してOCDというのは一つの枠組みとして提示されている…OCDの役割をそのようにとらえてみると、これは現実的に物事を進めていくための一つの方法と考えればよいのではないかという議論もなされました。もしそうなら、これらの能力を育てるための前提に何が必要だろうかという議論となり、多くの先生がたの意見として共通していた、まず必要なものとは、知識なのではないかということでした。やはりある程度物を考え分析していくためには前提となる知識が必要不可欠なのではないかと。知識をつけることが最初から重視されるべきでないかと話されました。別の言い方をするなら、1年生からC-PLATSの個々の能力を全部伸ばしていこうというのは無理があるということだろうと思います。まず最初に必要な知識が何かを考え、それらを土台として、その上に個々の能力を多様に伸ばしていくという流れがあるのではないでしょうか。その中には読み書きそろばんというイメージでしょうか、計算が自由にできるとか、そういったことが当たり前にできなければ分析能力を身につけるというようなことは難しいのではないでしょうか。であればそういった基礎能力がないのはしょうがないということでなく、それらをどうやって早いうちからつけさせるかということを考えることが大事ではないかということになります。就職に関することにつなげて考えても、やはりSPIの中でそういった能力も問われるでしょうから、基礎学力をつけることは重要ではないかということです。

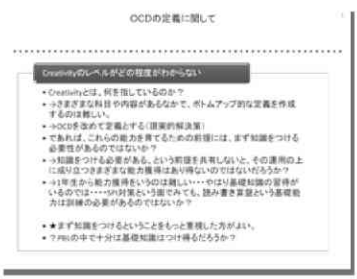
次に、もうひとつ出てきた大きな問題は、われわれがいろんな能力を付けさせたいと思い、さまざまな工夫をしているとは思うのですが、そもそも学生が意欲を持たない。どのようなことを提供しようとしても最後だけ来て隣の人のを写してそれらしく書いて提出しておしまい、それで点数をもらえればいいのではないかというようなスタンスからなかなか抜け出せない学生が少なからずいるのではないかということです。そうすると、まず学ぶことの意義や学ぶことに対する意欲を高めることが必要になるわけです。意欲がある、やる気があるという前提のもとに何を提供していこうかということではなく、そもそも意欲を高める、頑張ってやっていこうという気持ちになってもらうためにどんな工夫ができるか、といったところから考えていかなければならないのではないかと話されました。これはかなり多くの先生がたが共通して苦労されているところでもあり、だからどうすればいいか悩んでいるところであり、そしてこれといった手段を見出しにくいところかなと思われます。

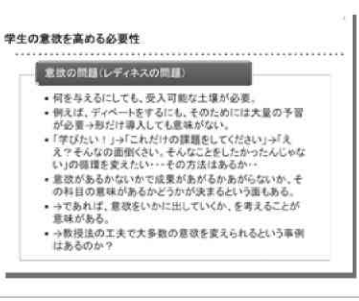
意欲をひき出すという事が大事だとしたら、ではどういった工夫ができるのかということですが、教授法の工夫で、はたして大多数の意欲をアップさせたり変化させたりできるのか、できるのであればどうしたらいいのだろうかということを前向きに考えないとなりません。これは、意欲を高めることと就業力をアップさせることの関係、もしくはC-PLATSに挙げられている能力をつけていくことと就職率を上げることとの関係になると思うのですが、昨日の話にありましたように、文系の学部を出るとやはり就職先として営業職が第一候補であるというのが世の中の現実としたら、それを早いうちにきちんと伝えるのは大切ではないでしょうか。営業職が何かもよくわからず、回避したり嫌ったりやりたくないと言ってしまう学生も少なからずいるかもしれません。その中で営業というのは多様な力を発揮して成り立つ実はおもしろい内容なのではないかと早いうちにどれだけ魅力的に伝えられるのかということが、もしかしたらポイントになるのではないかと思います。

大学教育改革研修「これからの大手前大学」-C-PLATSを座標軸に据えて-

・酒井　健 先生

そう考えてくると、営業するに耐えられるだけのタフネスさ、これはメンタル面もフィジカル面もそうですが、そういったタフネスさとコミュニケーション能力その他いろいろな能力をもつ学生を育てることがC-PLATSの現実的な達成の成果ということになります。ただ、それについては本当にそのように目標設定することがよいのかどうかという話も出ていました。多少乱暴に言いますと、問題解決能力がついたということは、ひとつの表れとしては、ものすごい高い営業力として発揮されうるととらえて本当によいのだろうかということです。これは改めて議論し、そのうえで授業の中で何ができるのかということをフィードバックして考えていく必要があるのではないかということです。その点については仮にC-PLATS能力の高い人の高い営業力をもっていることであるとして考えた場合、次のような説得といいますか、動機づけが必要なのではないでしょうか。たとえば営業という仕事は相手のニーズを読み取る分析能力も必要であり、相手の気持ちを察知するコミュニケーション能力も必要であり、相手が何を求めているのかということを私はこういうふうにわかりました、だからこう提案ができますといったプレゼンテーションや、説得力をもった説明ができるといった、実は多様な能力の集合体ですから、その能力を一つ一つ大学の授業を通して身につけていくことがあなたの将来にきっと役に立ちますよといった動機づけです。





説得力があるかわかりませんが、何かこういった話を折りにふれてすることを通して一つ一つの授業に対するモチベーションを上げていくことが大切ではないでしょうか。大学で学ぶ内容と就職が比較的直結しやすい学部、たとえば看護学部とかであれば、学ぶことと就職が当たり前のようにつながるので、比較的問題は少ないのかもしれません。一方リベラルアーツということで多様な分野、多様な内容、多様な方向性を学びつつこれらの能力につなげていく場合はかなり工夫がいるのではないかと思われるからです。もうひとつは就職率を考えたときに特殊な分野、たとえばプロの漫画家になりたい、イラストレーターになりたい、といった場合にこれらは就職率の指標が指標として十分に意味があるのだろうかということも疑問として提示されました。

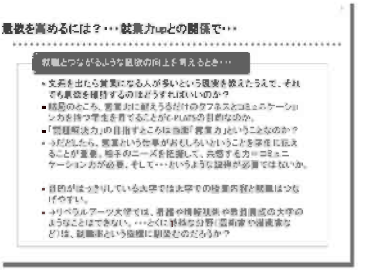
さて、今回初年次教育でどんなことができるのかということは一つの議論の的とありましたが、逆に多様な学生がきている、意欲も能力も興味の方向性も多様な学生がいるなかで、一律の、一律のというと語弊はありますが、同じテーマを与え、同じ内容を教育することで実際に意欲を伸ばすことは可能だろうかということです。けっして後ろ向きな話ではなくて、学部やメジャーで何をとりたいかによって学生の興味、どこがツボかということが変わるのではないかということです。興味にあわせてテーマの与え方を変えて、その中で共通してC-PLATSの能力を高めていくというそういった考え方も多少幅を持たせた検討してもいいのではないでしょうか。全員に同じことをしていくという部分と個別の能力に合わせてなんとか少しでも学生のツボをついていこうという方向性と2本立てもあるのではないかということですね。その場合、各学部やメジャーそれぞれの専門分野の先生がたにその専門的な内容にかかわりながらC-PLATSの能力を高めるカリキュラムもしくは授業内容を考えてもらい、それらを集めていって提示し、まとめていくというそういった組み立て方もありうるかも知れないと話されました。一律でやるなら1学年700人オーバーの多様な学生のかなりの部分をカバーできる興味や内容とははたして何なのかということをやはり目の前の学生を見ながら考え

ていかなければならないのではということにつながると思います。

ここまでは意欲を高めるということを教える内容との話でしたが、ファカルティーの課題であるアナリシスとクリエイティビティということと意欲、動機を高めることとをつなげてみようとしたときに次のような話が出ました。

現在学生たちには専門分野を決めるのはなるべく後半にして、じっくり自分たちのことを理解したうえで決めていきましょうと指導しているわけですが、そのためには早いうちから自分のことを知る、自分のことを分析して理解する、そして自分が目指す方向は何なのかということを考え、そのために何が必要かを自分で見出して、そのためにこの授業をとるのだ、この方向を学ぶのだということを自分で決めていくという話を1年生くらいからやっていくことが必要なのではないかということです。そうしないと2年生になっても何をやっていいのかわからないし、何をやりたいかわからないし、どう進んでいいのか見当もつきません、よくわからないまま3年生になりました、よくわからないまま4年生になりました、就職先、何をやりたいかをどう決めていいかわかりませんというようなことに、うかうかしているとなってしまうかもしれません。

それなら自由に選べる早いうちに何をしたいのか、どういった適正があるのか、自分は何に興味をもってがんばれそうなのかということを分析することを組み込んでいって授業を構成することは意味のあることではないかと思います。そういったことを通して自分にもこんな方向性があるんだ、こういうことができるかもしれない、こういうことなら人生を有意義にやっていけそうだということを少しでも感じ取れればそれが意欲とか前向きさとかを引き出し、やっていこうということにつながるのではないという話です。就職先は具体的に考える必要があると思いますので、例えば営業的な仕事ということが分野として大きいのであれば、そことつなげることも具体的に考えていいのではないかということです。残念ながら私の力不足もありまして、クリエイティビティやアナリシスの各項目をどのくらいどの段階で付けてほしいかというキレイな項目をあげることはできなかったのですが、しかしそれらを育てていく前提として意欲をどれだけ高められるか、前向きさをどれだけ与えられるかということを真剣に考え大事にしなければならないのではないかという部分は大事な議論としてできたのではないかと思います。それらの議論を行いましたということで、分科会の報告に



かえさせていただきます。もし分科会に参加された教職員の方々で私の報告から抜け落ちたことがあれば、補足・訂正していただければと思います。

●司会―

今の発表に対してご意見、ご質問、補足などあれば手をあげてください。

小川先生、昨日のグループの議論の中で気づいた点などございましたらお願いしたいと思います。

●小川先生―

私は一緒のグループでしたので、今のお話を聞いてまして、たぶん聞かれていた先生は何年生を対象にして何の話だったのわかりづらかったかと思いますので、ひとことだけ言わせてもらいますと、主に1年生のキャリアデザインでどういう力を、そこを重点的に、2年3年でどういった力をという議論をいたしておりません。とりあえず1年のときに意欲をもってほしいなと。やる気というのが一番難しい。これが簡単に大手前大学でできたら、他の大学もこぞって見に来ると思いますけれど、それでもたとえばフレッシュマンセミナーで全員同じテーマで行います。加えてクラス分けも同じ現代社会学のものばかり集まっている。でもそれちょっと変えてもいいのではないかなということでこのまとめの言葉が出たと思います。

●司会―

ありがとうございました。